

世紀末ウィーン散歩

2021年10月 虎長

何度も訪れたのに、また行きたくなる街がある。僕にとって、その筆頭はウィーンだ。ここでは19世紀末というテーマで中心街に絞り散歩をしてみたい。出張のついで、観光旅行の際に得た知識による。ウィーン駐在経験者が読まれたら古すぎる、あるいは誤った情報を見出すかもしれない。ご容赦を願う。

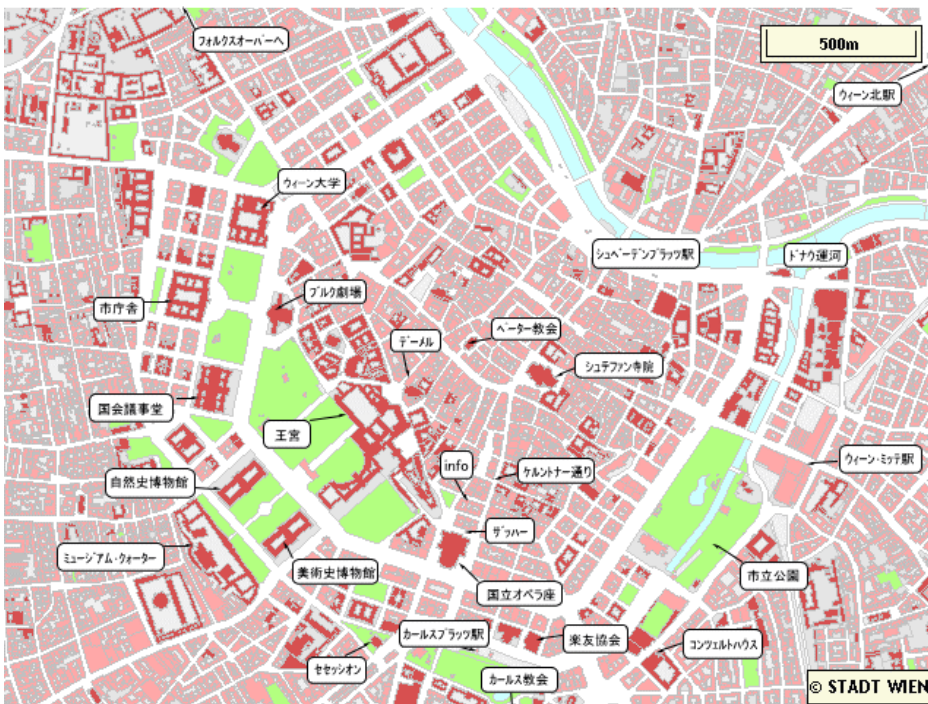
はじめに

世紀末という言葉：

フランス語の *Fin de siècle* を訳した言葉で、「末」という語感から「頹廢的」を連想することが多いようだが、この期の芸術には多様性があり、「頹廢的」とは言えないものも多い。ドイツ語では *Jahrhundertswende* 「世紀の転換期」で、要するに1900年前後ということだ。但し、ドイツ語辞書によると「世紀はじめ」として多用されるとのこと。

世紀末芸術：

美術の世界では、イギリスではラファエル前派とアーツ・アンド・クラフト、フランスではアール・ヌヴォー、イタリアで絵はステイーレ・リバティー、ドイツ語圏ではユーゲントシュティル、という言葉に代表される。ユーゲントシュティル運動として、ミュンヘン、ベルリン、ウィーン夫々に「分離派」が生まれた。分離とは、伝統・旧弊から分離して芸術を改革するという意味。



散歩の順序：

短期滞在の旅行者でも一日の徒歩で可能な範囲とした。北東のプラターから始め、南西に向かって、聖シュテファン寺院付近、国立歌劇場付近、分離派展示館、すこし東に歩いてベルヴェデーレ宮殿、もどってアン・デア・ウィーン劇場、さらに南下してマジョリカ・ハウス、とする。北西ウィーンの森は、ベートーベンとホイリゲ(ワイン酒場)で有名だが割愛。南西に位置する壮大なシェーンブルン宮殿も徒歩で行くのは大変なので省略。

プラター：

ウィーン北駅近く。お狩場が市民に開放され、万博会場となり、世紀末には遊園地となった。1873年の万博には岩倉遣欧使節団が訪れた。歓迎の席で美しい皇妃エリーザベトの隣に座った幸運な男は岩倉具視。遊園地の観覧車は今も現役。同時代のロンドン、パリの観覧車はとっくに無くなった。観覧車は映画「第三の男」の場面で有名であるのみならず、キャロル・リードにシナリオを依頼されたグレア



ム・グリーンが構想を練った場所でもある。ご存じと思うが、小説を映画化したのではなく、映画のシナリオが先で、後で小説にしたのだ。観覧車には僕もハンガリーへ出張した夏の週末に若い同僚たちと乗ったのが楽しい思い出だ。ブダペストへの帰路、沢山の東独ナンバーの自動車がハンガリー経由でオーストリアに向かっていった。ベルリンの壁崩壊が間近だったのだ。

2. 聖シュテファン寺院付近：

2-1. 食事：ウィーンのランドマーク聖シュテファン寺院を5分ほど北東へ行き右折したところがフライシュマルクトだが肉市場があるわけではない。「グリーヘンバイスル」というウィーン最古(1447年開業)のレストランがある。典型的なウィーン料理を試すのにお勧め。1977年はじめ、僕が初めてウィーンに宿泊したホテルがこの近くで、早速、夕食をとりに行った。地下にある大きな人形は、一階からのぞき見ることができる。チターの生演奏もあった。チターは16世紀スイスが発祥でチロール地方に広まり、19世紀が最盛期とのこと。「第三の男」でのアントン・カラスの演奏で有名になった。

フライシュ・マルクト近くのホーアー・マルクトにあるアンカー時計は20世紀初頭に作られたもの。

ウィーン名物ウィナー・シュニッツェル(薄く叩き伸ばした牛肉のカツ)なら、聖シュテファン寺院から徒歩3分のヴォルツァイレにある1905年創業の「フィグルミュラー」。皿からはみだすようにでかい。

もう一つのウィーン名物料理ターフェルシュピッツ(牛の尻と腿の間の肉を茹でたもの)は、同じヴォルツァイレにある「ブラフッタ」が有名だが、僕は他のレストランで食べただけで論評できない。



グリーヘンバイスル

アンカー時計

グラーベンの公衆トイレ

フィグルミュラーの
ウィナー・シュニッツェル

2-2. ショッピング・エリアとカフェ：

聖シュテファン寺院の近く西側ある巨大なペスト(終焉)記念塔のある所がグラーベン。聖シュテファン寺院から南へ国立オペラ劇場に向かうケルトナー通りと共に有名なショッピング・エリア。グラーベンには世紀末様式の地下トイレがある。マイセン焼きに次いで欧州最古の歴史をもつ磁器「アウガルテン」の直営店、世界的に出店を持つガラス細工の「スワロフスキー」の直営店もこの近くにある。

グラーベンを更に西に進んで左に曲がるとコール・マルクトに「カフェー・デーメル」がある。ショウケースのケーキを選んでコーヒーはテーブルで注文。ウィンナ・コーヒーというものは無い。ウィンナ・ソーセージというものが無いのと同様。「カフェー・ミット・シュラクオーバー」と注文すれば、ウィンナ・コーヒーがでてくる。ウィーンではコーヒーと一緒に飲み水が欧州では珍しく無料でついてきたが、今でもそうだろうか。シュラクはホイップの意味。オーバーとは牛乳の上澄みのこと。ちなみに、ホイップド・クリームをスイスではシュラクラム、北ドイツではシュラクザーネという。

話は飛ぶが、レストランの食後のデザートで僕が好きなものはカイザーシュマルン。卵が沢山入ったパンケーキが焼きかたまらないうちにスクランブルド・エッグのようにかきまぜ、フルーツを混ぜたもの。これは僕が勤務していた会社のオーストリア子会社の社長に教えてもらったもの。レストランでなくカフェでも注文できるかは知らない。



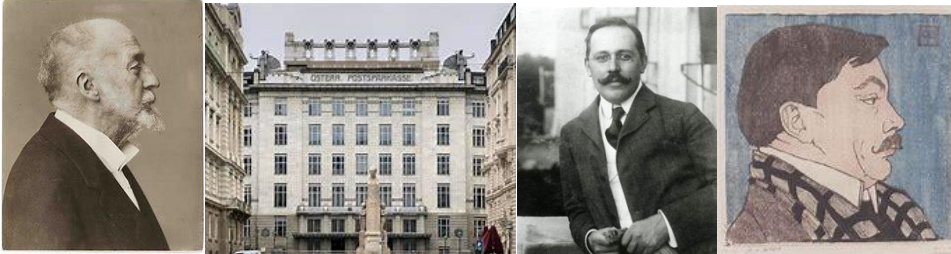
デーメルのケーキ

ホテル・ザッハーのザッハー・トルテ

カイザー・シュマレン

2-3 オーストリア (応用)工芸美術館と郵便貯蓄局 :

聖シュテファン寺院から東へ行くと、オーストリア工芸美術館がある。ヨーゼフ・ホフマンとコーロ・モーザーによるウィーン工房の工芸品の宝庫。過度な装飾よりも機能美を追求し、独特の曲線・直線を描く工芸品は、大衆相手を目的としながら、作品は高価になり、買い手は金持ちのブルジョアになってしまった。郵便貯蓄局は世紀末ウィーンを代表する建築家オットー・ヴァーグナーによる。ファサードはリベット模様が美しい。僕は内部を見ていないが、中央ホールは二重のガラス天井で明るく、冬暖かいという。



オットー・ヴァーグナー 郵便貯蓄局 ヨーゼフ・ホフマン コーロ・モーザー (自画像)

3. 国立歌劇場付近 :

3-1. ホテル・ザッハー、カフェ・モーツァルト :

ホテル・ザッハーは 1874 年に宮廷歌劇場(現国立歌劇場-1869 年完成)の横に建設された。映画「第三の男」でホリー・マーティンズが泊まった。僕はこのホテルに泊まったことはないが、カフェでザッハー・トルテ(チョコレート・ケーキ)を食べたことはある。観光客が多く、席をとるのが大変だった。ホテル・ザッハーとカフェ・デーメルとのザッハー・トルテの本家争いの話は有名なので省略する。ホテル・ザッハーのものはアプリコット・ジャムの層があるのが特徴。近くに、モーツァルト死後 3 年に創業のカフェ・モーツァルトがある。「第三の男」でロケに使われたが、ロケ当時の位置は現在の位置と異なるとの説もある。

3-2. ロース館 :



ロース館

アドフ・ロース(コロシュカ画)

国立歌劇の裏から北西に行くとミヒャエル広場があり、その一角にロース館がある。アメリカ帰りの建築家、アドルフ・ロースが 1910 年に建てたもので。現在の眼には、あまり変哲がないように見えるが周囲の古典的な建物群と全く異なる超近代的建物で、当時はセンセーションを起こしたという。地階(日本の 1 階)と 1 階(日本の 2 階)は商店・事務所で外壁が緑の大理石、上は

3-3. 国立歌劇場(シュターツオペラー)

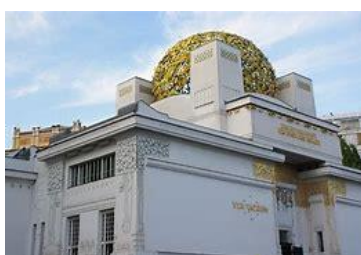
まずは個人的経験から。1977 年のこと、当日券を求めて 3 時間行列にならび、300 円の最上階でヴァーグナーの『ラインの黄金』を 4 時間立ち見。プログラムは 350 円だった。数年後にもっとよい席でモーツァルト『魔笛』を堪能。当時、上り坂のグルベローヴァの「夜の女王」の凄さに仰天したのは良い思い出。1897 年に総監督となったマーラーは、舞台装置をモダニズムやユーゲント・シュティル様式の簡素なものに置き換えた。上演中に客席の照明を落とす慣行を作ったのもマーラー。Jシュトラウスの『こうもり』は、オペレッタ(格下と見なされた)としてこの劇場では上演しない慣習だったが、マーラーが初めて上演。



3-4. リング(環状路)を時計回りに歩いてすぐ左がマリア・テレジア像を挟んで美術史美術館と自然史博物館。向かいには新王宮があるが省略。マリア・テレジアは自身天然痘にかかり、種痘を奨励したとか。長期安定という共通項で彼女とメルケル首相が最近比較されるそう。二人とも「お母さん」イメージか。美術史美術館には世紀末作品はあまりない。ブリューゲル作品が多いのは、親戚のスペイン・ハプスブルグ家がフランドルを領有していたため。美術史美術館を見るだけで時間がかかる。リングを更に時計回りに進むと国会議事堂、ブルク劇場、市庁舎、ウィーン大学があるが本日は省略。

4. 分離派展示館：

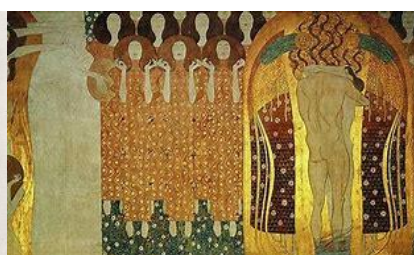
4-1. 展示館：国立歌劇場からケルントナー通り沿いにリングを渡り、ブラームス像交差点で右へいくとすぐに分離派展示館。分離派は「ウィーンにも独自の新しい芸術を」と、クリムトをリーダーとしてホフマン、モーザー、オルブリヒなど画家、建築家、装飾デザイナーらにより 1887 年に結成された。建築家のオットー・ヴァーグナーが 2 年後に参加。展示館の完成は 1898 年。設計はオルブリヒ。クリムトの描いたフレスコ画「ペーター・ベン・フリーズ」は 1902 年に展示。その時マーラーは宮廷歌劇場オーケストラのメンバーを引き連れ、金管用に編曲された『第九』を演奏した。マーラーと分離派との関係は、妻アルマによる。



分離派展示館



ヨーゼフ・マリア・オルブリヒ



ペーター・ヴェン・フリーズ



グスタフ・クリムト

4-2. アルマ・マーラーについて：風景画家シントラーを父とするアルマは、マーラーと結婚する前にクリムトと親しく、またアルマの作曲法の師である作曲家・指揮者ツェムリンスキー(今年 2021 年は生誕 150 年)とは結婚話もあったが、美貌にめぐまれない彼はアルマと結婚できず、アルマは、より大物のマーラーと結婚。ちなみにツェムリンスキーの妹は新ウィーン楽派のシェーンベルクと結婚。アルマはマーラーとの結婚生活の終わりころには、後にバウハウスのリーダーとなる建築家グロピウスと親密になる。マーラーが 1911 年に亡くなった一年後、画家ココシュカと関係をもつが、グロピウスと結婚。

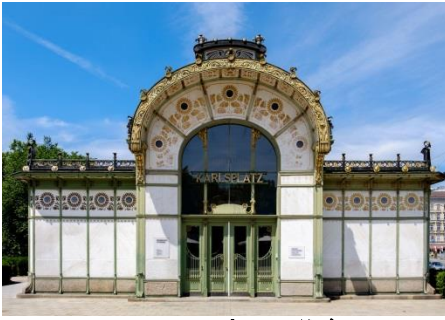


グロピウスと離婚の後は、50 歳で作家・詩人ヴェルフェルと結婚。66 歳で 3 人目の夫を見送った後 85 歳まで生きた。ミューズともファム・ファタルとも言われ、通称は常にアルマ・マーラー。アルマの実母の再婚相手である画家モル(実父の弟子)の家には分離派の芸術家が集い、彼らとアルマとの交流があったため、マーラーもその場を介して分離派との関係を持った。

5. カールスプラッツ駅舎、ベルヴェデーレ宮殿：

5-1. カールスプラッツ駅舎：国立歌劇場からケルントナー通り沿いにリングを渡り、ブラームス像交差点で左へ曲がると、芸術家会館、楽友教会、そしてカールス教会のあるカールス広場がある。カールスプラッツ駅舎(1898~1899 年)は、オットー・ヴァーグナーによる駅舎建築の一つ。白い壁に金色の飾り。ユーゲントシュティルの優雅な造り。今は駅舎でなく博物館とカフェになっている。

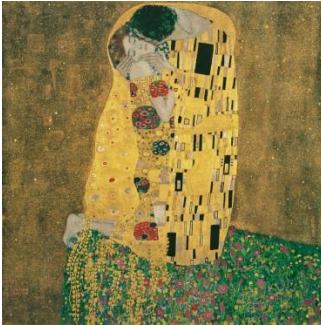
5-2. ベルヴェデーレ宮殿：カールス広場を南下すると左手にある。宮殿から庭園越しに見るウィーン市街の眺めは、まさにベルヴェデーレ(よい眺め)。ここにあるオーストリア美術館(以前は 19・20 世紀美術館といった)は世紀末芸術の殿堂。クリムトの『接吻』、『ユーディット I』、エゴン・シーレの『芸術家の妻』、『死と乙女』、ココシュカの『羊の死骸のある静物画』、『画家カール・モルの肖像』は必見。カール・モルは述のようにアルマ・マーラーの義父。なお、ココシュカ描く『風の花嫁』(ココシュカとアルマの抱擁)はウィーンにはなく、スイスのバーゼルにある。なお、個人蒐集による 20 世紀前半の作品を中心に 2001 年にレオポルト美術館が、ミュージアム・クオータ(美術史美術館裏)に開設されたが、僕は見えない。



カールスプラッツ駅舎



ベルデペーレ宮殿



クリムト『接吻』



エゴン・シーレ『死と乙女』



ココシュカ『母と子』

6. アン・デア・ウィーン劇場: 分離派展示館の前の通りを少し西南に歩けば、右に見える。

1801年創建で国立歌劇場より歴史が古い。当時はオーケストラ奏者が客席に背を向ける配置だったという。ベートーヴェンの『フィデリオ』も、J.シュトラウスの『こうもり』もレハールの『メリー・ウィドウ』も、クンツェ作詞/リーバイ作曲のミュージカル『エリーザベト』と『モーツァルト』もここで初演された。この二つのミュージカルは英語の字幕付きでYouTubeで見ることができる。再び個人的な思い出。幼い子供たちを僕がホテルで世話している間に、妻に一人で『メリー・ウィドウ』を観に行かせた。帰りの夜道は全く安全だったという。今でも治安状態は同じだろうか。1992年頃、楽友教会での演奏会の当日券が買えずに落胆している僕に、プレイ・ガイドのおばさんが強く薦めてくれたのが『エリーザベト』で、結果は大満足だった。日本で「宝塚」や「四季」がとりあげるより以前のことである。

7. マジョリカ・ハウス: 前述のアン・デア・ウィーンとは「ウィーン川畔の」という意味だが、劇場のあたりは暗渠化されて川は見えない。分離派展示館の前から南西に向かいリンケ・ウィーンツァイレという広い通りがこの暗渠の上にある。ナッシュマルクトという食品市場が伸び、その先の空き地は土曜に蚤の市に使われる。この空き地から見上げるアパートはオットー・ヴァーグナーの設計(1898~99年)で、コーロ・モーザによる装飾デザイン。38番地壁面は、女性の顔の金色のメダイオンと植物模様。屋上にはアルミニウムの女性像2体。40番地壁面はマジョリカ産タイルによる花模様。通称マジョリカ・ハウス。賃貸住宅から同じような連続窓の単調さを克服することをめざしたものだが、当時の保守派の反対で、この二つをやめざるをえなかった。



アン・デア・ウィーン劇場



リンケ・ウィーンツァイレ 38番地



マジョリカ・ハウス

以上